

# The Experience

ガルバットは肉体を持たず、我々が慣れ親しんだ物質界を知らない。

それはエネルギー体であり、思考からなる生命体のすむ次元からやってきた。

彼の世界では、思い描いたことがそのまますぐに現実となる。我々の物理世界とは異なり、妨げとなるものがなにもないからだ。

経験を積むにつれ、この実体は知識を深め、進化のより高次のステージへと自己意識を強める。意識の到達した高みにも関わらず、あるいはむしろそのために、ガルバットは満たされない。

ある基本的な経験の中に飛び込む時がきたという確信が、次第に彼の中で大きくなる。彼は決めた：我々の世界を知るために、“旅”に出ようと。物理的な体験をしてみよう、肉体を感じてみよう、自然に直に触れてみよう。

## The Journey - 新しい世界

ACT 1 - 旅人(ガルバット)は、好奇心と期待に溢れ、これからする経験がそれまでとはまったく異なるであろうことがわかっている。だからこそ、この挑戦にはより一層心が踊る。

何よりも、人間というものを味えるかもしれないのだ。その精神、その魂、そしてもちろん肉体と、それを動かしてみようということは、彼にとっては心をとらえる神秘的なのだ。

ACT 2 – ふと郷愁と憂鬱を覚え、ガルバットは自分の世界を思い出す。彼の意識には、それまでの体験と、かつての自分、そして今の自分を形付けた意識の変化の瞬間が走馬灯のように巡る。

物思いに耽る彼の周りの霧がゆっくりと透けて、新しい情景が浮かびあがる。

物質化している。信じがたいプロセスだ。自分の体が形をとっていき様子を驚き眺める。精神と魂が肉体に宿り、完璧な調和を作りあげたときには呆然となった。太陽が初めて昇り、我々の世界にやってきた旅人の新しい肉体を光の波が洗う。

## Breathing Flower - 花との出会い

ガルバットは自分がたどり着いたこのまだ知らぬ魅力的な世界を、少しずつ理解していく。初めて息を吸うと、空気が彼の肺を広げ酸素を運ぶ。朝のやわらかなそよ風が彼をくすぐる。初めて嗅ぐ香に包まれ、全霊で酔い痴れる。恍惚とした眼差しは、輝く地平線を遠く彷徨う。新しい体験は恐ろしくもあり、わくわくもする。ある意味、怖いのだ：何が待ち受けているのかわからない。

新しい状況に、彼はフラストレーションと無力感を味わう。しかし一方で、どんどんと力と自信がわいてくる。旅人は、呼吸が操れるということに察した。強く速く、または深くゆったりという具合に調整できる。もう一度強く、そしてまたゆったりと、動物という生命の形を見抜いたかのよう。ガルバットは気が楽になった。怖がることはないのだ。物質界はそう悪くない。むしろ、本

音を言えば、信じられないほど美しい場所だ。この世界に文字通り夢中になり、更には、何かより広大で深遠なものの一部であるという感覚に有頂天になる。世界の上を滑空しながら、自然の荒削りで完璧な形態に、鮮やかな色彩に、植生に驚嘆する。それまでの純粹に精神的な経験とはまるで似ていない。新しいヴィジョンが彼を豊かにし、虜にする。

本能的に、手を胸に置いてみる。なんと心臓が鼓動しているではないか。ほとんど感動的といえる感覚だ。地面に触れてみる時がきた。

初めて地面に足を置いてみると、妙な感じだが、最高の気分だ。

刺激的な肉体感覚に押され、ガルバットはどンドンと歩を進める。最初は覚束なげに、そして次第に確かな足取りで。

地面と繋がっているというのは心地よい、踏み出すたびに地面が支えてくれる。地球の支えは当てにできる、裏切られることはない。

自然が生きた創造物であることを察する。肉体という初めての体験の中で、自然は道案内をしてくれるだろう。

ガルバットは、どンドンと力が漲り、あふれ出るエネルギーのおかげで無敵にさえ感じられる。確固とした足取りで、こぶしを握り、腕をまっすぐ脇に伸ばし、新しい世界をあますことなく見取ろうと薄目を凝らす。

彼は嬉しい発見をする。五感から伝わる感覚を知覚し、吸収し、分析することができるのだ。その根本の意味を彼は本能的に理解する。驚嘆。

植物という生命体の中で、とりわけあるひとつのものが旅人の注意を引く。花、それは未だかつて見たこともない、実に繊細で魅力的な創造物だ。彼らの間には必然的な繋がりと感じる。

その素朴で無防備な美の前にかがみ込むと、ガルバットはそれに魅入られ、共鳴した。ほのかな息づかいが感じられるほどに。

植物という生命体はその精気で啓示する命の循環の秘密に圧倒され、見かけはひどく弱々しいこの生き物に宿る力の大きさを、旅人は理解する。

花は死ぬだろう、自然の摂理に従って。だがその死によって花はより強く生まれ変わる。

ガルバットは感服し、深い敬意を払わずにいられない。静かにかがみこんだまま、自然の中の自分の居場所をきちんと自覚しているこの小さな生命体に対して、“思いやり”の涙が頬を伝う。立ち上がる。花が伝えた思いやりの感情で、彼の内面はより豊かになった。自信と自覚をより深め、自然との繋がりを強みに、ガルバットはまた歩き始める。この世界の体験を続けよう。

## Closer - もっと人間のそばへ

ガルバットは、この世界が彼を迎え入れる準備ができていると悟る。生きた自然は最大限の好意を示してくれた。

ふと、旅人は遠くに人間の姿を認めた。そう、人間だ、この世界を支配する生き物だ。肉体

知的に高度な能力を与えられた生き物、しかし彼の進化レベルからはかけ離れた生活を送っている。

なんとしてもこの生き物に接触せねば。この世界を完全に経験するには、人間を避けては通れない。

もはや沈みかけた太陽が、地上に濃い影を落としている。ガルバットは人体の塊にぶつかった。見かけ上、彼らはわけもなく息を切らせ興奮している。彼らがなぜこうも息せき切っているのか理解できない。

人間が“時間”と呼ぶものは、彼のいた世界では何の意味も持たない。ガルバットは人込みに飛び込んでみる。

通り過ぎるとき、何人かの人間にぶつかったりかすめたりした：こんな奇妙な感覚は初めてだ、わけがわからない。

この生き物にアイコンタクトを試みる。だが彼に気づく者はいない。

人間は自分のことに夢中で、周りのことには気づかないようだ。

すぐにまた別の人間とぶつかってしまう。なんとも言い様のない香りが漂う。接触を試みるが、やはり誰も彼に気づいてくれない。人間は周囲の生物には無関心なようだ。彼らの奇妙な錯乱に導かれているようだ。ガルバットは人混みから離れ、気分を落ち着ける。

人間に近づくのは容易ではない、だが断念する気は毛頭ない。この冒険はあまりにもおもしろいのだ。先ほど起こった接触事故を思い返すと、そのときの強い感情が蘇る。

あの妙な香りに引き起こされた動揺が生き生きと蘇る。人間の精神との関係を築くという欲望は強烈だ。しかしこの不可解な生き物の意思に干渉するのは不可能とみえる。

ガルバットは彼らの自発性を邪魔する気は毛頭ない。彼らの考えを操る気もない。

## Artificial Thought - 精神への旅

ある物音がガルバットの思考を邪魔する。前に一人の女が立っている。彼はアイコンタクトを試みる。この女とコミュニケーションをとりたい、疑問に答えてほしい。

胸が高鳴り、呼吸が速まる。

この女と接触しようとするが、うまくいかない。生命の背景音が強すぎて邪魔をする。複雑で理解に苦しむ生き物だ。

植物という生命体とのコミュニケーションがいかに容易かったかを思い起こす。背景音が耳をつんざくほどになる。

一旦、肉体性から離れたほうがよさそうだ。

人間とは精神的な関係を築く方がずっと簡単だろう：彼らの精神を理解するのに、肉体は邪魔と見える。

ガルバットは人間の意識の一部になろうと試みる。花と同化したときのように、溶け込んでみよう。

混乱、矛盾する思考。共通の価値観の色褪せた影。これが人間の精神の中身だ。接続確

立。

ついにやった。大いなる混沌の中で、旅人は、生活の陳腐な心配事の影に隠された、存在の深い意味を垣間見る。

背景音は消える様子がない。人間の精神の内的葛藤の多さといったら！無数。

これが人類の無理解と不幸の本当の原因だ。必死で望む現実と、実際に生きざるを得ない現実の間の、埋めようのない相違。更なる雑音。

少しずつ、ガルバットは対話を築くことに成功する。彼の、深い自覚のある意識と、人間の、表面的で混沌としたそれとの間にある大きな隔たりを乗り越えて。

彼は察する：差の大きな2つの意識レベルの間のコミュニケーションは、弁証法的関係によってのみ可能であると。彼と人間が出会える共通の場といえば、自然であろう。

人間の感情を、更に高いレベルの自覚へと導くことができれば、彼らは地球との調和を取り戻すことができるだろう。

さあ、新しい認識だ：人間は、自覚の程度が低いせいで、冷たい技術に氣をとられて命の本質を忘れていて。分かち合いと友愛を捨て去り、物質的な豊かさへの度が過ぎた欲望の陰に、その本来の性質を押し隠して。

自然から徐々に遠ざかったせいで、すっかり生気をなくし、目的も持たず、自覚とその深い本質の無限の広がりへの強い感動を味わう力もない。ガルバットは痛恨をもって認める。人間の意識を、自覚の高みへと導くのは至難の業なのだ。

皮相な欲望にあまりにも氣をとられ、日常の陳腐な心理メカニズムにあまりにもはまり込んでいる。旅人はもう一度だけ試して見る。しかし諦念し、その企てを放棄してしまう。

人間は、旅人の深いヴィジョンにほんの一瞬かすめられながらも、すぐに混沌と同時に浅薄ないつもの思考方法へと立ち戻る。自分たちが発明した技術、どんどんと進化し、どんどんと凝って、そしてどんどんと空虚になる技術を弄んで喜ぶ。

## The Wait – 消化

旅人には省みる他なかった：人間は、進化を助けようとしてくれた彼の接触の試みを理解できなかった。惨めな敗北だ。人間たちがどれほど自然に深く根差し関わっているのかを理解できるのはいつのことだろう？ガルバットにはわかっている。やることが山積みだ、とりあえずはこの敗北と失望を乗り越えなければ。

## Traveler – リターンズ

旅人は、憂鬱な気分と、今訪れたばかりの世界へのほのかな郷愁とおそろわれ、この出会いが偶然ではなかったと感じる。

ある意味、深く真摯な絆がそこにあると感じる。彼の能力を知っている自然そのものが、助けを求めてきたかのようだ。人間の抱える困難を認識している地球という惑星そのものが、あえて彼に助けを求めたかのようだ。

彼のミッションは、人間が属する世界とのより良き調和を見出すために、その背中を押してあげることだった。しかし旅はもう終わった。

彼が垣間見る栄誉に与ったこの素晴らしい世界は、物質の実体性ととも溶けて消えていくようだ。

もしくは、旅人の方から立ち去ったのだろう。ガルバットは、郷愁が強まるのを感じながら、言葉にならない体験を慈しむ。

新たな、そして強烈な自覚と、驚くべき世界の鮮烈で身を苛むような記憶が残っている。

あの世界の深い本質を彼に見せてくれたのは、小さな植物型の生命体だった。その儚さにも関わらず、並外れた力を秘めていた。あの小さな花は、自然の普遍的な言葉をもって、何の抵抗もなく彼と会話した。

自分が属する世界に戻ったガルバットは、奇妙な居心地の悪さを感じる。一方で、時間のない完璧な世界の一部であることを認識して安堵を感じる：帰郷はいいものだ…彼の世界では、あるレベルから別のレベルへの進化はあつという間だ。物質のガラクタは欲望の実現を阻まないし、失敗は存在しない。

もう一方で、彼はいまま地球との絆を感じる：初めて失敗の苦味を味わったのだ。自ら掲げた目標を達成できなかった、だが敗北を前に諦めたわけではない。挑戦はまだ終わったわけではない。

疑いはない：人類との絆は強くなりすぎた、解けるものではない。

この挑戦には抗いがたい魅力がある：物質性を再体験しに、自然の知識を深めに、戻らねばならない。

だが今回こそは、人間の精神と調和のとれた関係を築かねばならない。彼らが自身を知る手助けをして、その限界を超えることができるように。

そう、決まった！戻る…。感情が急激に蘇り、彼の意識と人間のそれとの対話の記憶に刺激され、驚くほど精力が漲る。いつか人間も感度が上がり、より上位の意識に違和感なく感応する力をつける日がくるだろう。

憂愁と、この覇気漲る挑戦との間で葛藤しながら、彼の意識にある確信が生じた：いつか、ガルバットという天使が、理解される日がくるだろう。